

梁塵秘抄選釈（第二回）

卷第二四句神歌神分編（二）

永池健二 佐々木聖佳 松石江梨香

はじめに

梁塵秘抄卷第二、四句神歌神分編の選釈第二回をお届けする。今回掲載したのは、二四三歌、二五九歌、二七三歌の三首である。前回の選釈第一回を公表後、ご覧いただいた先学諸師から貴重なご批評ご教示をいただいた。年間数首といわずもつと精進してスピードを上げるよう叱咤激励も頂戴した。にもかかわらず、わずか三首しか掲載できなかったのは、ひとえに執筆者らの力不足で慙愧に耐えない。正直に打ち明けると、ほかにも神歌数首の掲載を予定していたのだが、十分な準備が整わず発表を見合わせたものである。より精進を重ねて次回を期したいと思う。

前回の注釈作業の母胎となった「奈良教育大学古典と民俗の会」は、昨年七月に改組し、井出幸男、佐々木聖佳、植木朝子、永池健二の四人が発起人となって、あらたに若いメンバーも加え「遊女（うかれめ）文化研究会」として再スタートした。今回の三首の注釈は

そこでの輪読と検討の作業を踏まえたものである。末尾になったが、前回同様影印は『天理図書館善本叢書古楽書遺珠』から転載させていただいた。原本ご所蔵の天理大学付属天理図書館及び版元の八木書店に厚く御礼を申し上げます。

（永池健二）

（凡例）

- 一、本編は、『梁塵秘抄』卷二、四句神歌の今様について、歌ごとに注釈を試みるものである。第二回は神分編の三首をとりあげる。
- 二、詞章本文は、天理大学附属天理図書館蔵（竹柏園旧蔵）『梁塵秘抄』卷二を底本とする。各歌のはじめに、底本を『天理図書館善本叢書古楽書遺珠』（昭和四十九年、八木書店刊）より転載し、その後に、底本の翻刻と校訂本文とを掲げた。
- 三、底本の各歌には、朱で頭に「○」印が付され、歌の途中にこれも朱で「」が加えられている。歌詞の傍らには漢字や平仮名による読み仮名、傍点が付されているものもある。それらもできる限り忠実に表記した。

四、校訂本文は、底本をふまえて各担当者の解釈を反映したものを表記した。誤字、脱字、衍字と考えられる箇所については訂正し、適宜漢字を当てて読み仮名を付した。異体字は通行字体に改めた。また、歌の区切れと考えられる部分に一字分空白を入れた。諸説があるものについては「校訂」でその旨を記した。

五、歌番号は、『新日本古典文学大系 梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』の歌番号に拠った。

六、校訂本文の後に、校訂、類歌、関連歌謡、諸説、語釈、考察を記した。諸説は、先学の注釈のうち、特に歌の解釈に関わるものについて諸説を整理して記した。

七、参考にした先行の注釈は以下の通りである。本文中には番号もしくは略称を用いて記した。

- ① 佐佐木信綱『梁塵秘抄』（大正一年 明治書院）（大正十二年 同増訂版）（昭和七年同改訂版）↓佐佐木注
- ② 佐佐木信綱『梁塵秘抄』（昭和八年 岩波文庫）↓岩波文庫
- ③ 高野辰之『日本歌謡集成巻二 中古編』（第十一 梁塵秘抄 巻第二）（昭和四年 春秋社）↓歌謡集成
- ④ 小西甚一『梁塵秘抄考』（昭和十六年 三省堂）↓小西考
- ⑤ 小西甚一『日本古典全書 梁塵秘抄』（昭和二十八年 朝日新聞社）↓古典全書
- ⑥ 荒井源司『梁塵秘抄評釈』（昭和三十四年 甲陽書房）↓荒井評釈
- ⑦ 志田延義『日本古典全集 歌謡集上』（昭和九年 日本古典全

集刊行会）↓古典全集

- ⑧ 志田延義『梁塵秘抄評解』（昭和二十九年 有精堂）↓評解
- ⑨ 志田延義『日本古典文学大系 和漢朗詠集 梁塵秘抄』（昭和四十年 岩波書店）↓大系
- ⑩ 小林芳規・神作光一・王朝文学研究会『梁塵秘抄総索引』（昭和四十七年 武蔵野書院）『校注 梁塵秘抄』（昭和四十七年 武蔵野書院）↓総索引
- ⑪ 新間進一『梁塵秘抄』（『日本古典鑑賞講座14 日本の歌謡』（昭和三十四年 角川書店）↓鑑賞講座
- ⑫ 新間進一『梁塵秘抄』（『鑑賞日本古典文学 歌謡Ⅱ』（昭和五十二年 角川書店）↓歌謡Ⅱ
- ⑬ 新間進一『日本古典文学全集 神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（昭和五十一年 小学館）↓全集
- ⑭ 新間進一 外村南都子『日本古典文学全集 神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（平成十二年 小学館）↓新全集
- ⑮ 新間進一 外村南都子『完訳日本の古典 梁塵秘抄』（昭和六十三年 小学館）↓完訳
- ⑯ 榎克朗『新潮日本古典集成 梁塵秘抄』（昭和五十四年 新潮社）↓榎集成
- ⑰ 浅野建二『梁塵秘抄』（『鑑賞日本の古典 今昔物語集 梁塵秘抄 閑吟集』（昭和五十五年 尚学図書）↓浅野注
- ⑱ 武石彰夫『梁塵秘抄』（『研究資料日本古典文学5 万葉・歌謡』（昭和六十年 明治書院）↓研究資料

①⑨ 武石彰夫 小川寿子『新日本古典文学大系 梁塵秘抄 閑吟

集 狂言歌謡』(平成五年 岩波書店) ↓新大系

②⑩ 上田設夫『梁塵秘抄全注釈』(平成十三年 新典社) ↓全注釈

②⑪ 西郷信綱『日本詩人選22 梁塵秘抄』(昭和五十一年 筑摩書

房) (平成二年 ちくま文庫) (平成十六年 ちくま学芸文庫)

↓西郷注

②⑫ 塚本邦雄『君が愛せし—鑑賞古典歌謡』(昭和五十二年 みす

ず書房) ↓塚本注

②⑬ 秦恒平『NHKブックス 梁塵秘抄—信仰と愛欲の歌謡』(日

本放送出版協会 昭和五十三年) ↓秦注

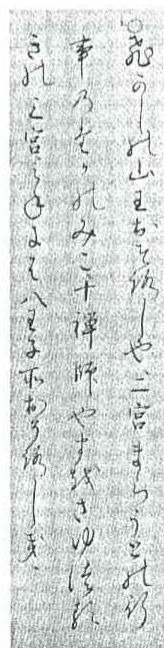
②⑭ 渡辺昭五『梁塵秘抄の風俗と文芸』(昭和五十四年 三弥井書

店) ↓渡辺注

②⑮ 加藤周一『古典を読む 梁塵秘抄』(昭和六十一年 岩波書

店) ↓加藤注 (佐々木聖佳)

二四三歌



【翻刻】

○ひかしの山王おそろしや、二宮まらうとの行

事のたかのみこ、十禅師やまをさゆつる

きの三宮、みねには八王子ぞおそろしき、

【校訂本文】

○東の山王おそろしや 二宮客人の 行事の 高の御子

十禅師山長石動の 三宮 峯には八王子ぞおそろしき

【校訂】

ゆつるき↓ゆするき

本文は「ゆ徒類き」とあるが、「ゆ須類き」の誤写と考える。

⑨ 新大系「誤写類型Ⅰ」

【類歌・関連歌謡】

・ 神の家の小公達は 八幡の若宮 熊野の若王子子守御前 日

吉には山王十禅師 賀茂には片岡貴船の大明神 (二四二)

・神の御先の現するは 早尾よ山長行事の高的御子 牛の御子
王城響かいたうめる鬢頬結びの 一童や いちぬさり 八万
に松童善神 此処には荒夷 (二四五)

・一品聖靈吉備津宮 新宮本宮内の宮 隼人前 北や南の神客
人 良御前はおそろしや (二七〇)

【諸説】

ひかし「比叡山の東麓」① 櫻集成 ② 新大系「王城の東」③ 大系「東方」④ 全集 ⑤ 新全集 ⑥ 完訳「京都の東にあり、比叡山の東麓にある故」⑦ 荒井評釈 ⑧ 山王「大宮」⑨ 荒井評釈 ⑩ 大系 ⑪ 全集 ⑫ 新全集 ⑬ 完訳「比叡山の山王権現」⑭ 全注釈 おそろし「神威が高く靈驗灼然にして異罰たちどころに下るさま」⑮ 荒井評釈 ⑯ 大系 ⑰ 新大系「神々への畏敬」⑱ 全集 ⑲ 新全集 ⑳ 完訳「畏怖」㉑ 全注釈 まらうとの 諸注異説なし。日吉大社の客人宮とする。「のは歌調を調える語」㉒ 荒井評釈 ㉓ 新全集「並列を表す語」㉔ 大系 ㉕ 新全集 行事の 諸注異説なし。日吉大社の大行事宮を指すとす。たかのみこ 諸注異説なし。日吉大社の下八王子の撰社、高の御子社とする。「祭神は比叡山陀我神の子の意で、陀我神の使者、白猿とされている」㉖ 荒井評釈 十禪師 諸注異説なし。日吉大社の十禪師宮を指すとす。やまをさ 諸注異説なし。早尾宮の撰社である山長社を指すとす。ゆづるきの 諸注異説なし。「ゆづるき」の誤写、大行事宮の撰社、石動社とする。三宮 諸注異説なし。日吉大社三宮とする。峯には「牛尾山」① 完訳「神体山」② 新大系 ③ 八王子 諸注異説なし。日吉大社八王子宮とする。諸注、賀茂神社の撰社である片山御子社とする。全体の解釈「社名を列挙した歌謡」④ 大系 ⑤ 全集 ⑥ 新全集 ⑦ 完訳 ⑧ 新大系 ⑨ 全注釈「社名を列挙し、真剣に神威を畏しさを歌うのではなく、散文形式を歌謡にしただけ」⑩ 荒井評釈

【語釈】

ひかしの 東の。王城の東の意であろう。秘抄二四四歌「仏法弘むとて、天台麓に述を垂れ おはします 光を和らげて 塵となし 東の宮とぞ斎はれおはします」、同四一七歌「大宮靈鷲山 東の麓は菩提樹下とか 両所三所は釈迦薬師 さては王子は観世音」とある。

日吉社は比叡山の東麓にあり、それを「東の宮」「東の麓」と表現することもあるが、秘抄二四七歌に「王城東は近江、天台山王峯の御前」とあり、日吉社は王城の東の守護神として尊崇されていたことから、王城の東と解釈したい。

山王 日吉山王権現。大宮を山王と呼ぶことや、地主神である二宮を山王と呼ぶこと、山王の撰社末社を言うこともあるが、ここでは「山王おそろしや」の次に、二宮から始まり、八王子まで山王権現に連なる神々を列挙していることから、日吉社に祭祀されている山王権現とその眷属である小神たちを指すと考える。東本宮系の二宮、十禪師、八王子、三宮と、西本宮系の大宮、聖真子、客人を合わせて山王上七社という。『伊呂波字類抄』十巻本の日吉の項には、「大比叡、号大宮 小比叡号二宮 聖真子 客人宮 八王子 十禪師 三宮 已上謂之七社 王子宮 下八王子 早尾 行事 已上謂之十一社」とある。『神道集』八者高座天王事には「比叡大願修禪寄、昔彼所住衆生擁護、傳教大師此山一乘圓宗弘時、山王權現顯」とある。また「遙其最初尋、御願頂修禪石上、常樂我淨四德波羅蜜波懸、以來、彼峯住、今傳教大師一乘圓宗此山弘、麓下山王權現顯、廿一社内、上七社申、一宮大宮法宿權現號、御本地大恩教主釋迦如來是也、二宮名地主權、今高座天王是也、本地藥師如來是也、三宮聖眞子權現名、阿彌陀如來也、四宮大八王子名、本地千手觀音也、五宮客人宮名、本地十一面觀音也、六宮十禪師權現名、本地地藏菩薩也、七宮第三王子名、本地普賢菩薩也、此外下八王子・々々宮・大行事・早尾等、本地虛空藏・文殊・多聞天・不動明王等也、總上中下合廿一社也」と

ある。山王の語源については、「豎三點横一點加、三諦即是法門、常住佛會妙覺、朗然頓味高山也、横三點豎一點加、三德秘藏法門、妙法頓悟藥、圓頓實教心王也、兩字念願即山王二字也」(神道集)とある。

おそろしや 神仏に対して「おそろし」を使用する際には、その神威、靈驗に対する畏怖の心を「おそろしや」という。秘抄二七〇番「畏御前はおそろしや」秘抄二八四番「不動明王おそろしや」。「露にぬれたる櫓一枝立ったりけるこそおそろしけれ。やがて山王の御とがめとて」「山王おりさせ給て、やうやうの御託宣こそおそろしけれ。」(『平家物語』)「第一本卷十四願立」とあり、どちらも山王の神威の顯現に対して「おそろし」という言葉が使われている。

二宮 東本宮とも。二宮は、日吉の地主神である。『古事記』には、「次に大山上昨神、亦の名は山末之大主神、此の神は近淡海國の日枝の山に坐し、亦葛野の松尾に坐して、鳴鏑を用つ神ぞ」とある。「日吉社禰宜口伝抄」には、「二宮、大山昨神自神代領此地、故曰地主明神、相殿四座、大山昨神、玉依姫神、玉依彥神、別雷神、」とあり、「天智七年、大宮造営之後、以當社曰小比叡宮」ともある。以下に列挙されている諸神は、客人宮を除き、すべて二宮の小神たちである。まらうとの 客人の。「の」は詠嘆の間投助詞。白山宮とも。客人宮は、上七社の一つであり、祭神は白山妙理権現である。「日吉社禰宜口伝抄」には「客人宮、所祭白山比賣神、又名菊理姫神、則伊奘奈岐、伊奘奈美之奇魂也」とあり、「厳神抄」には「客人ノ宮ト申ハ、即白山ノ妙理権現ノ御事也、妙理権現ハ、又天照太神ノ母御前伊奘

冉尊ニテ御スナリ、或ハ伊奘諾、伊奘冉共ニ白山ニ御スト申説モ在之、客人ノ宮ノ御前ニテ、岩上ニ雪一尺計リ積リテ、其上ニ神跡御影向、此雪餘ノ所降ラザリケリト云々」とある。この逸話と同系統のものが、『続古事談』にも見られる。『源平盛衰記』巻第四「白山神興登山」にも客人宮の縁起譚として「比叡辻ノ神主ガ夢ニ見タリケルハ、戸津比叡辻ノ浦ニ、イミジク飾尋常ナル船七艘有、日中ナルニ篝火燃ス。舟ゴトニ狩衣ニ玉櫛アゲタル者ノ、北ヘ向テ舟ヲ漕。『イカナル人ノ御物詣ゾ』ト問バ、『白山権現ノ神興ノ御上洛ノ間、御迎ニトテ山王ノ出サセ給御舟也』ト申。魚云者ノ姿ヲミレバ、身ハ人、面ハ猿ニテゾ有ケル。(中略)能美ノ山ノ峯ツツキ、塩津、海津、伊吹ノ山、比良ノ裾野、和余、片田、比叡山、唐崎、志賀、三井寺ニ至マデ、皆白平ニ雪ヲ降。」という逸話が載せられている。また、『平家物語』には「白山の神興、既に比叡山東坂本につかせ給ふと云程こそありけれ、北國の方より、雷緩く鳴つて、都をさしてなりのぼる。白雪くだりて地をうづみ、山上・洛中おしなべて、常葉の山の梢まで、皆白妙になりにけり」とあり、客人宮の神の靈威は、降雪という形で顯れるということがわかる。

行事の「の」は「客人の」に同じ。大行事とも言う。山王十一社の一つであり、後に中七社の一つに組み込まれた。早尾と並んで山王権現の有力な眷属神、守護神であり、御先払いの神として猿田彦神に比定された所から、猿行事ともよばれた。(選釈第一回 二四五番歌)「延暦寺護國縁起」巻上には「大行事宮 俗形。非普通人體高名惡神也。此大神天地開闢之時俱連神。高皇產靈尊。地主権現傍

大行事ト顕レリ」とあり、御先神として、強い神威をふるっていた神であることがわかる。(↓選釈二四五歌)

たかのみこ 高の御子。下八王子の小社の神で、下八王子の東側南端に祀られている。「日吉社禰宜口伝抄」や「日吉山王位階形像記」

等にその名が見える。「下八王子社、祀天照大神奇魂、前五柱所謂五男神之幸魂曰、八取、早取、若宮、彌高、高御子也」(日吉社禰宜口伝抄)また、和訓栞には「たかのみこ」を「日吉の社にて猿をいふといへり」とある。「たかのみこ」ともあやしとみましけり ざるまろをしもひきたてとや」(夫木和歌集 二十七雑部)「山王の御とがめとて、比叡山より大なる猿どもが三千おりくんだり、手々に松火をともひて京中を焼くとぞ、人の夢には見たりける」(『平家物語』

寛一本巻一「内裏炎上」)(↓選釈二四五歌)

十禪師 山王十一社の神の一つ。「中古横川ノ香積寺十人供僧中二、一人智行兼高德人在テ、十禪師ノ中二其一人、現身二山王ト語言ヲ申通ズル人、荒人神ト成給へり、仍十禪師ト申也」(耀天記)「十禪師権現ハ、天照太神ノ御孫火瓊々杵尊ノ御事」「十禪師権現トハ、日本無双ノ靈社、天下第一ノ明神ナリト云々」(厳神抄)七社略記では「十禪師荒神申事」として、「爲穢惡邪欲之者成天恠、名羸亂神、荒神也」とある。『源平盛衰記』卷四「殿下御母立願事」「出羽の羽黒より上たる身古と云童御子の籠たりけるが、十禪師の御前にて、俄に狂出て舞乙でけるが、暫有て死入けり。何者ぞ門外へ昇出せと云けるに、事の様を見よとて、大庭に昇居て守之。やゝ在て走出で舞乙、人奇特の思を成処に、汗押拭申けるは、衆生等慥にきけ、我には十

禪師権現乗居させ給へり。」同盛衰記卷五「澄憲賜血脈事」「十禪師の宮の造合より、白髪たる老女一人現じて、心身を苦ましめ、五体に汗を流て、我に十禪師権現乗居させ給へり」とあり、十禪師は託宣神であつた。(↓選釈二四二歌)

やまをさ 山王十一社の一つである早尾の摂社に祀られる神である。「日吉山王位階形像記」や「日吉社神役年中行事」等にその名が見えるも、詳しいことは不明である。「早尾、私市、大石右脇、已下五社、自北至南、山長、勢多伽童子、」(耀天記)「早尾小社 私大殿左脇、已下五社自北至南、山長勢多賀童子」「山長 劫羯羅、或勢多賀」(日吉位階形像記)。勢多賀、劫羯羅はどちらも、不動明王の眷属神である八大童子たちである。八大童子の中でも、この二神は不動明王の両脇に据えられ、右に勢多賀、左に劫羯羅という三尊形式で絵画や彫像に表されることが多い。早尾の神は『神道集』において本地が不動明王とされていることから、八大童子の一である勢多賀童子が比定されたか。(↓選釈二四五歌)

いするきの 石動の。「の」は「客人の」に同じ。山長と同じく、早尾の摂社に祀られる神である。能登から勧請された神のようで、「日吉山王位階形像記」には早尾小社の項に「石動宮 明星天子、能登国神也、山長並社」と記載されている。『延喜式』神名帳には、能登郡十七座の一つとして「伊須流支比古神社」の名がある。この社は、石川県鹿島郡中能登町石動山にある社で、能登国の二宮である。『神道集』巻第四「能登国石動権現事」では、「抑此権現者、男鉢女鉢俱二立玉へり、先ツ男鉢ハ本地虚空蔵、(中略)次二女体者、本地ハ如意

輪観音ナリ」とあり、石動権現は男女の神であることが窺える。伊須流支比古神社に祀られる五柱の神（大宮・客人・火宮・梅宮・劍宮）を五所権現と呼ぶ。客人宮には白山比咩神が祭祀されており、白山との強い結びつきが窺える。考察参照。

三宮 牛尾山の峯上に、八王子と並んで鎮座している女神である。「三宮事、貴女三人顯給故、三宮云也」（耀天記）「三宮権現ハ、八王子ノ御兄弟八人ノ内、三女ノ神ニ別ニ齋シ顯レ奉ル故ニ、三ノ宮ト號奉ル、第三ノ影向ト申ニテハ非ズ、只三女ノ神ヲ以テ三宮ト申ナリ」（厳神抄）「三宮御分 三宮女形桓武天皇即位延暦六年、從空乘紫雲、女人形、八王子金大巖傍天降、手持法華經、大師奉見之崇、三宮権現、」（七社畧記）

峯には八王子ぞ 峯とは、八王子と三宮が鎮座している牛尾山を指す。牛尾山には、金大巖と呼ばれる巨大な岩があり、この巖の両脇に、三宮と八王子が並んで祭祀されている。もともと、地主権現が來臨したのがこの金大巖の上であり、來臨の際に共に天下つた八人の童子が八王子であるとされている。「上代日吉神社申者、今八王子社也、此峯在比叡山東尾、又曰牛尾、」（日吉社彌宜口伝抄）「八王子宮事、大舍人頭成仲宿禰總官彌宜説云、此砌大宮始テ天降住御之刻、自八王子峯、八人童子ビンスラユヒテ、下臨御テ、田樂ヲシテ大宮ヲ奉饗給リ、自其田樂ノ本座ハ、八王子ノ御輿ノ御共ニテ御祭ノ時モ候也云々、其八人童子ノ形ハ、此山ノ神ニテ住給ヘリ、」（耀天記）「八王子権現ト申ハ、天照太神ノ御子五男三女八王子ニテ御座ナリ、…匡房扶桑明月集二ハ、八王子権現ヲ巴國挾槌尊ト云々…八王子

権現八千ノ御子ト顯レテ、八王子山ノ猿ノ馬場ヨリ、五色雲ニ乗テ大宮ノ社壇ニ至テ止テ、田樂シテ大宮権現ヲ慰メ申サセ玉ヒケリ、」（厳神抄）「近江國滋賀郡小比叡、東山金大巖傍天降、八人皇子引率天降、言八王子也」（七社畧記）「表白の詞にいはく、『我等なたねの二葉より、おほしたて給ふ神たち、後二条の関白殿に、鑓箭一はなちあて給へ、大八王子権現』とたからかにぞ祈誓したりける。やがて其夜不思議の事あり。八王子の御殿より、鑓箭の声出でて、王城をさして、なつてゆくとぞ、人の夢には見たりける。其朝関白殿の御所の御格子をあげたるに、唯今山よりとツてきたるやうに、露にぬれたる櫓一枝立ッたりけるこそおそろしけれ。」（『平家物語』巻一「願立」）この神もまた、靈威の発現によっておそれられた神であった。（考察）参照

【考察】

『梁塵秘抄』四句神歌には、日吉山王の神々にまつわる今様が数多く採録されている。この二四三番歌も、日吉山王権現とその小神たちの神威とそのおそろしさを歌いあげるものである。「東の山王おそろしや」と、第一句で山王の神々の靈威高きおそろしき様子を歌い、その後、山王に連なる「おそろし」とされる神々の名を連ねていく。そして最後には「峯には八王子ぞおそろしき」と、再び「おそろし」という形容詞を用いることによって山王十一社の神の一つである八王子の「おそろし」さを強調して終わっている。

選釈二四二番歌にみえる十禪師は託宣を行う、崇りなす強力な神であった。二四五番歌において歌われた早尾、山長、行事、高の御

子、牛の御子も、荒々しい靈威をふるう御先神であつた。この二つの歌と二四三番歌に歌われている神々の多くが重なりを見せているが、それ以外の客人宮、石動、三宮、八王子、そしてそれらを束ねる二宮もまた、同じような「おそろし」い性質を持つ神なのである。

客人宮は、白山から勧請された神である。『源平盛衰記』では、「涌泉寺喧嘩事」において、白山中宮の末寺である涌泉寺において、目代が狼藉を働いたために、白山の衆徒が蜂起し、延暦寺を頼る逸話を記載している。この逸話や、『源平盛衰記』の客人宮の縁起譚（客人宮項参照）から、白山と比叡山が強く結びついており、そのために白山から勧請された客人宮が、上七社の一として重く扱われたことが読み取れる。

石動は、能登と関わりのある神であることが、「日吉山王位階形像記」の「石動宮 明星天子、能登國神也、山長並社」からわかるが、式内社であり能登國二宮である伊須流支比古神社には、古縁起が残されており、この社には「金剛證大宝満宮縁起」と冒頭に記された縁起が残されている。元和九年（一六二三）西塔院時慶・時興の父子が旧記に修正を加え、清書したものであるとされている。縁起によると、「天地開闢須弥百億於、俾都而四洲、然南閻浮提各在護命、其護命云石也、三名朝字動字竹字云、此三石於三千大世界為枝葉累広、故三千大世界名」とあり、三つの石はそれぞれ天下り、其のうちの一つである動字は、「動字玲瓏涌在金剛証大宝満宮」となった。この動字を護持するために、天目一箇神が峯に降り、「福祐自在天目一箇尊預座在峰、名金剛証宝満峰石動山」となったという。また、新縁

起は承応八年（一六五三）林羅山が記したもので、「北陸道能登郡石動山、昔聞星墜為三石、象天有三光也、或曰石自天漢流下、故曰石動山、延喜式所載能登國伊須流岐比古神社是也、石動此云伊須流岐、此山者泰澄法師之所開也、蓋与白山靈神同一体也」とあり、古縁起を簡略化した上で、白山と同一神であると述べている。（『石川県鹿島町史 資料編』参照）

それぞれに強い神威を発揮し、畏怖の念をこめて尊崇されていた日吉の神々であるが、この中でも、最も重要視され、おそれられていたのは、八王子の神である。「峰には八王子ぞおそろしき」と強い調子で、八王子のそのおそろしさを歌い上げている。

八王子もまた、十禪師の神と同様に、強力な呪詛神であり、託宣神でもある。『平家物語』覚一本巻一「願立」では、八王子の神矢によつて関白師通が倒れる説話が記載されている。「表白の詞にいはいはく、『我等なたねの二葉より、おほしたて給ふ神たち、後二条の関白殿に、鎗箭一はなちあて給へ、大八王子権現』とたからかにぞ祈誓したりける。やがて其夜不思議の事あり。八王子の御殿より、鎗箭の声出でて、王城をさして、なつてゆくとき、人の夢には見たりける。其朝関白殿の御所の御格子をあけたるに、唯今山よりとつてきたるやうに、露にぬれたる櫓一枝立ったりけるこそおそろしけれ。」とあり、その後関白師通は病を受けて倒れてしまう。師通の母は日吉に七日間参籠していると、満願の夜に八王子社の前で童神子の託宣をうける。日吉社に寄進を行うことで師通はしばしの延命を授かるが、その後まもなく身まかることとなる。『源平盛衰記』巻四「殿

「下御母立願事」には、死後も八王子権現に苦しみをうける師通の姿が描かれている。「関白殿薨去の後、八王子と三宮との神殿の間、磐石あり。彼石の下に、雨の降夜は、常に人の愁吟する声聞えけり。参詣の貴賤あやしみ思けり。余多人の夢に見けるは、束帯したる気高上臈の仰には、我はこれ前関白従一位内大臣師通也。八王子権現我魂を此岩の下に籠置せ給へり。さらぬだに悲、雨の降夜は石をとりて責押に依て、其苦み難堪也とて、石の中に御座とぞ示給たりける。」とあり、死して猶許されることのない、八王子権現の冥罰の恐ろしさが、まざまざと描かれている。また、『太平記』巻十七には、足利軍が比叡山を攻め上り、横川まで押し寄せてきた際に、八王子権現が童に憑き、託宣を行つた逸話が記載されている。「御廟の材木を元に戻せば、早尾と大行事を遣わせて、明日の午の刻にでも敵を追ひ払おう」という内容の託宣であつたがあまりに信じがたい託宣であり、その場の衆徒の胸中に隠され、人々に知れわたることとはなかつたが、早朝に早尾・大行事社から猿が多数群れをなしてあらわれ、鐘をうちならした。その後、八王子権現の託宣どおりに足利軍は撤退を余儀なくされ、大将高師重は衆徒に捕らえられた。ここでも、八王子権現の神威の強さを窺い知ることができるとある。

日吉には、神輿振りという強訴の方法があつた。朝廷の決定を覆させるために、神輿を持ち出し、門前や陣頭、橋の上などに振り捨てるのである。日吉の神人たちが訴えを起こす際に、たびたび御輿振りを行つていたことは『百鍊抄』や『平家物語』諸本等に記されている。『平家物語覚一本』第一巻「御輿振」には「さる程に、山門の

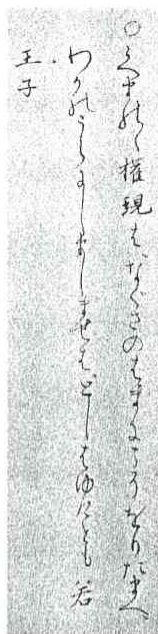
大衆、国司師高を流罪に処せられ、目代近藤判官師経を禁獄せらるべき由奏聞度々に及といへども、御裁許なかりければ、日吉の祭祀をうちとめて、安元三年四月十三日の辰の一点に、十禪師・客人・八王子、三社の神輿、貫り奉りて。陣頭へ振奉る。」とある。また、嘉承三年三月の神輿振りでは八王子・客人の二社の神輿が持ち出され、保安四年には三聖と三宮の神輿が、保延四年には八王子・客人・十禪師の神輿が、久安三年、延暦元年、嘉応元年には三社の神輿がこの神輿振りで担ぎ出されていた。特に十禪師、客人、八王子の三社の神輿は、何度も神輿振りに担ぎ出されていることがわかる。神輿振りは、振り捨てられた神輿の靈威が高く、畏怖心を喚起させるものでなければ意味が無い。朝廷の裁断を揺るがせるためには、その振り捨てられた御輿の神威がおそろしく、触れることも撤去することもできないものでなければならぬからだ。そのため、神輿振りに登場する神輿は、日吉山王の中でも、より「おそろし」と人々が感じる神輿であつたはずである。

八王子権現を筆頭に、神輿振りに担ぎ出される十禪師、客人、「高名悪神」と呼ばれた大行事、そしてそれらを束ねる古くから日吉の地に鎮座していた地主神二宮など、当時の人々にとつては、この歌に歌いこまれた神は、どの神も靈威が猛々しいおそろしき神々であつたと考えられる。この歌は、荒井評釈を始めとする諸注が指摘するような単に日吉の諸社を列挙したのみの歌謡ではなく、京より東方に位置する山王の眷属神たちに対する畏怖の心を、実感をこめて歌い上げ、冥罰ではなくその加護を願ひ、歌つたものであると考えら

れる。

(松石江梨香)

二五九歌



【翻刻】

くまのの権現は、なぐさのはまにこそをりたまへ、

わかのうらにしましませは、としはゆけとも若

王子

【校訂本文】

○熊野の権現は 名草の浜にこそ降りたまへ

若の浦にしましませば 年はゆけども若王子

【類歌・関連歌謡】

・熊野の権現は 名草の浜にぞ降り給ふ 和歌の浦にしましませば

・せは歳は ゆけども若王子

(梁塵秘抄口伝集卷第十)

・熊野の権現は 名草の浜にぞ降りたまふ 海人の小舟に乗り

たまひ 慈悲の袖をぞ垂れ給ふ

(秘抄四一三歌)

・いやくまのゝこんけんわか宮は いやわかのうらにそをはします
いやくわかのうらにしましませはや いやしゆしやうのみか
ひをみてたまふいやくまのにはむすふはや玉まつみこよ い
やなる玉とうしにやくいちの御せん

(天文本伊勢神樂歌 くまのの歌)

【諸説】

くまのの権現 「熊野坐大神は証誠大権現」(6) 評釈「熊野十二所権現の五所王子の一体若一王子」(9) 大系 以下 16 集成 19 新大系 20 全注釈もこれに従う。なぐさの浜「名草の濱」今の海草郡。「歌しらぬ身よりあまれるおもひにはなぐさのはまのかひもなきかな(宇津保物語「祭の使」)。(4) 考「今の海草郡にある」(5) 全書「和歌浦の東辺紀三井寺村毛見浦一帯の海浜である。昔の名草郡で、北方に名草山がある。倭姫命世記に「崇神天皇五十一年、大神邊木乃國奈久佐浜宮」とある。」「(6) 評釈「紀三井寺の所在が名草山の半腹で、西の和歌ノ浦から半里、名草山西麓一帯の海岸が名草の浜。これから東南に灣入して藤白に至る。」「(9) 大系「和歌山市の紀三井寺のある名草山近辺の浜。」「(13) 全書「若の浦」と同所、今の和歌浦」(16) 集成「名高(方)の浜か。狭義の名草の浜では不可解」(19) 新大系 などを。をりたまへ (4) 考は、「西天摩訶陀国大王慈悲大願王」が「崇神天王即位元年秋八月」に「紀伊国室ノコホリニトママリ(中略)イママサシク熊野ノ権現トアラハレタマフ」という「諸神本懷」の記事をひく。「お降りになつて鎮座せられている」(9) 大系「降臨なさるのだ」(13) 全書「鎮座していらつしやる」(16) 集成「鎮座する」(4) 全書「わかのうら 雑賀崎から毛見崎にいたる浦。若を掛けたる」(4) 考「紀伊名草郡(今は海草郡)にある名勝地、雑賀崎より毛見崎までの紀三井寺村一帯の海浜。昔は弱浜とも言つた。万葉集卷六「若の浦に潮みちくれば濁をなみ草辺をさして田鶴鳴きたる」(山部赤人)」(6) 評釈「和歌山にある。歌枕として著名」(13) 全書「和歌浦湾の奥で、「片男波」の砂嘴によつて囲まれた部分。和歌川と紀三井寺川とが注ぎ込む」(20) 全注「若王子」「玉津島神社をさすか。祭神、稚日女尊」(4) 考「20 全注もこれに従う。」「藤白(代) 若一王子社」(6) 評釈「若一王子社(藤代王子)は紀伊国海草郡藤白の浦にあり、本地十一面観音」(9) 大系「藤白若一王子社か」(13) 全書

【語釈】

くまのの権現 熊野の権現。「権現」は「権（かり）に現れる」の意。

日本の神々は仏菩薩が衆生済度のために仮の姿で現れたとする本地垂迹思想に基づいた呼称。靈感ある有力な神々に用いられた。熊野では、家津美尊、結、速玉の三神を三所権現、若一王子、児之宮、子守宮、飛行夜叉などを加えた十二神を十二所権現と称した。三所の

本地は、家津美が阿弥陀、結が千手観音、速玉が薬師。（熊野草創由来雑集抄）若一王子は十一面観音。「熊野権現者、自天降中天竺摩竭陀国、名慈悲大顯王、又曰家津美尊、」（熊野山略記）。⑨ 大系、

⑩ 集成、⑪ 新大系など、末句の表現からこれを「若王子権現」のこととするが、後掲のように本歌は、十二所権現の藤代の地への垂迹を歌ったものであるから、若王子だけに限定すべきではない。なぐさのはまにこそをりたまへ 名草の浜にこそ降りたまへ。「口伝

集卷十、四二三歌ともに、「名草の浜にぞ降りたまふ」につくる。「を（降）る」は神霊が降臨すること。「大將軍こそ降りたまへ」（秘抄二六九歌）「ちこの御前そをりたまふ」（天文本伊勢神樂歌・ちこの御前の哥）。名草の浜は、旧紀伊国名草郡の中央部の海浜に面した孤峰名草山の麓に広がる浜をいった。『和歌山県の地名』は「類字名所集を引いて、「名草浜は北の名草山、南西の船尾山系にある浜辺一帯を指して呼ばれていた」とする。かつて雑賀山から名草山、船尾山にかけて広がっていた若の浦が名草郡の陸岸と接していた海浜を広く総称し、後の毛見の浜や名高、鳥居の浦の浜なども名草の浜の一部であつたものと思われる。名草の浜は、『倭姫命世記』崇神天皇

の条に「五十一年甲戌、遷木乃国奈久佐浜宮、積三年之間奉齋」と見え、後には、「見るからになぐさの浜も袖ぬらしけり」（狭衣一八六）「なぐさの浜を尋ねわびぬる」（長秋詠草三四四）など、「無く」や「心なぐさむ」にかけて詠まれて歌枕となった。⑫ 新大系は、「狭義の名草の浜では不可解」として「名高（方）の浜か」と注するが、従えない。

わかのうらにしましませば 若の浦にしましませば。若の浦に鎮座していらいしやるので。「し」は上の連用語を指示強調する強意の終助詞。「まします」は、ある、いるの意の尊敬語「ます」を二つ重ねたもの。より強い敬意を表し、多く神仏や皇族などに対して用いられた（日国）。「尺迎はつねにましまして」（二二九）、「ちはやふる神神にましますものならば」（四四七）など。ここは、以下のごとき熊野十二所権現が若の浦、藤代（白）の岸に示現したという伝承を踏まえたもの。「孝安天皇御時紀州三上郡若浦藤代熊野十二所権現乗船顯示現」（『熊野社記纂』所載「熊野三所権現金峯金剛藏王降下御事」）「同（孝照天皇―引用者）御代十二所権現乗御船、紀伊国藤代着岸、楠上七十日坐、依之今十二所権現藤代御坐」（『熊野山略記』）。前述のように若の浦は、北の雑賀山から名草山を経て南の船尾山に囲まれた広い海湾を指し、その名草郡の陸地と接した浜岸が名草の浜と呼ばれていたと思われるから、前句の「名草の浜にこそ降りたまへ」の表現と矛盾しない。また藤代王子社を麓に抱える藤代の坂は、「熊野へまゐりけるに、ふぢしろにてわかの浦を見やりて」（『夫木抄』一一四四四）などとあるように、北に若の浦の絶景を望む眺望の地で

あり、熊野の神域の入口、熊野参詣の出発点として、ほぼ一つ所として理解されていたのであろう。

としはゆけども 年はゆけども 年は経ていても。「いやうちのさといすゝのはらのひめこまつ いやとしはふれともいもかはらす」(天文本伊勢神楽歌)。熊野権現の若の浦への影向示現がはるか昔のことであることを行っているのであるが、それを末句の「若王子」に掛けて洒落てみせたのである。住吉大社の神主家津守国基の歌に「としふれどおもいもせずしてわかのうらいくよになりぬたまつしまひめ」(『国基集』一五三歌)とある。明らかに本歌の表現と繋がりがあろう。

若王子「にやくわうじ」と読んだのであろう。熊野の五体王子(五所王子)の二で、「若一王子」とも「若女一王子」とも称され、しばしば女体とされた。『長秋記』長承三年(一一三四)二月一日の条は「五所王子」の第一に「若宮女形本地十一面」と掲げ、「熊野草創由來雜集抄」は「御神体之事」の条に十二所権現を掲げて「一若女一王子 天照太神 十一面觀音 御託宣に我本地は觀自在王十一面也ト云々」と記す。藤代は十二所権現の垂跡の地であったが、その地の藤代王子社は、若王子を主神として祀る五体王子社として数多い王子社の中でも特に重要視された。「若女一王子、天照太神垂迹、両所権現王子也、若女一王子之號、尤有所以者哉、新宮置千木饅木事、證誠両所若一王子四所也、藤代又鳥居額云、日本第一大靈驗所根本熊野三所権現若女一王子、」(熊野山略記)。藤代王子社の成立は定かではないが、藤原為房『大御記』永保元年(一〇八二)九月十月の

熊野参詣の記事に九月二十六日「酉刻著藤代人宿」とあり、「熊野権現金剛藏王宝殿造功日記」(統群書七十六)所載の白河院の天治二年(一一〇一—原本「大治」)十一月の参詣記事に「五所王子舞樂有。藤代王子。切目王子。稻持王子。瀧尻王子。発心門王子」、吉田経房の『吉記』承安四年(一一七四)九月二十五日条にも「於藤代王子行里神楽」と見えるから、本今様成立時に、すでに藤代王子が若王子を祀る五体王子社として尊崇を集めていたことは間違いない。

【考察】

「熊野詣で」を歌う五連章の四首目。前歌の二五八歌と同様に、本歌も藤代に祀られた熊野若王子信仰の影響下にまず藤代の地において歌われたものと見なければならぬ。語釈において述べたように、熊野権現の名草の浜・若の浦への垂迹、示現を歌う本歌の主意は、次のごとき伝承を踏まえたものである。

「第六代孝安天皇御時紀州三上郡若浦藤代熊野十二所権現乗船爐示現」(『熊野社纂記』所載「熊野三所権現金峯金剛藏王降下御事」)
「同(孝照天皇—引用者)御代十二所権現乗御船、紀伊国藤代着岸、楠上七十日坐、依之十二所権現藤代御坐」(『熊野山略記』)

ほぼ同文の上二句を持ち、「海人の小舟に乗りたまひ」と歌う秘抄四一三歌も同様であろう。この二首は、共に熊野権現の藤代の地への垂迹を歌い、同じ担い手によつて同じ場で同様に享受された類歌であり、連章であったと思われる。

秘抄二五八歌の語釈・考察(「選釈(第二回)」所収)においても述べているように、藤代の地は、熊野の神域の内と外を分かつ第一

の結界の地であり、熊野の神域の最初の入口と見なされていた。いつの頃からか藤代王子の手前には大鳥居が構えられ、その鳥居の額には「日本第一大靈現所根本熊野三所権現若女一王子」（熊野山略記）と記されていたという。『紀伊国王子社略記』『藤代王子』の項に「社伝ニ云フ」として、「當社八景行天皇五年ノ鎮座ニシテ、齊明天皇牟婁郡ノ溫泉ニ浴シ給ヒシ時、神祠創建シタルヲ聖武天皇弱浦行幸ノ時皇后ノ命ヲ以テ行基僧正コノ地ヨリ熊野神ヲ遙拜ス、孝謙天皇玉津島行幸ノ時、熊野廣瀆供奉ス、請ニヨリテ宣旨ヲ奉シテ三山ヲ此地ニ遷シ奉リ、末代后妃夫人熊野遙拜ノ便トス、此等ノ由緒ニ因リテ熊野一ノ鳥居ト稱ス、古境内ノ入口ニ樓門アリ、勅額ノ銘ニ曰、日本第一靈驗根本熊野三所権現トアリトイフ、」とあるのは、信ずべくもないが、この地が早くから熊野三山遙拜の地、熊野一の鳥居の地として特別視されてきた次第を伝えていよう。

往事「紀路」（二五六歌）と呼ばれた古代・中世の熊野参詣道は、京から天王寺、阿倍野、堺を経て南海道を南下し、葛城山系の雄ノ山峠を越えて山口湯屋に下り、川辺で紀の川を越え、吐崎、和佐、山東と、名草山の東側の内陸部を南下し、且来から汐見峠を越えて西へ下り、はじめて海浜に出た。そこが若の浦に接した名草の浜の南端部で、南に藤代の山が控えていた。そこに「祓戸王子」（熊野道間愚記）が祀られ、後に熊野一の鳥居が建てられたのである。若王子を祀る藤代王子社は、そこから少し南に下った藤代の峠の麓に坐す。永保元年（一〇八一）の藤原為房の熊野参詣では、九月二十六日に紀伊の国府南路を経て日前・国懸両社に奉幣し、「藤代人宿」で

宿泊している（『大御記』）。この時期、藤代王子社が成立していたか定かではないが、すでに参詣の道者のための「人宿」は構えられていたのである。以後、参詣者は、決まって藤代に宿り、翌早朝藤代王子社に詣でて険しい山道を登って藤代坂頂上の塔下王子社に至った。建仁元年（一一〇一）十月九日に後鳥羽院の熊野御幸に従ってこの地に至った藤原定家は、「攀昇藤代坂、五体王す、有相摸等云々道崔嵬有恐、又眺望遼海非無興」と記している。山頂塔下王子社に立つと、足下に広がる若の浦と長く続く名草の浜の絶景が一望に見渡せたのである。この藤代の地こそ熊野の神域の内と外を分かち第一の結界だったのであり、熊野参詣道の紀路は、文字通り、この地を始点としたのである。「熊野へ参らむと思へども、徒歩より参れば道遠し」と歌った二五八歌が、まさにこの地に響き渡った歌声であったことは前回選釈の通りである。

こうした藤代の地に、熊野権現の垂迹伝承が生み出された背景については、いくつかの事実を指摘しておかねばならない。その第一は、この名草の地とそれに接した若の浦・名草の浜が神を迎え祀るにふさわしい清浄の地とされてきたという事実である。紀伊国北西部に位置する名草郡は、紀伊国府の所在地で、日前・国懸の両名神大社にやはり名神の伊太祁曾大社を有し、伊勢国度会多氣二郡や出雲国意宇郡、筑前国宗形郡などと共に八神郡の一つであった。名草一郡が日前・国懸両宮の神領とされ、両宮はまた「名草宮」とも呼ばれ、それを奉斎したのが紀国造家であった（『角川地名辞典30和歌山県』）。『日前国懸両大神宮本紀大略』によれば、天照大神の前霊とさ

れる御鏡と日矛の両神宝を託された紀国造の祖、天道根命は、神武東征の折りに日向の高千穂宮から難波を経て、加太浦、木本から名草郡毛見郷に至り、その琴浦の海中の岩上に二神宝を奉祭した。その後豊鍬入姫命名草浜宮御遷幸の折りに浜宮に遷り、さらに今の宮地である万代宮に遷座したという。松前健は、右の古伝は、「古い岩上祭祀の記憶を伝えたもの」であり、浜宮はまた、「古い時代のお旅所であった」と推測している（『日本の神々』和歌山県）。右の古伝は、むろん『倭姫世記』崇神天皇の条に「五十一年甲戌、遷木乃国奈久佐浜宮積三年之間奉斎」の記事を踏まえたものである。鎌倉時代まで降るとされる『倭姫世記』のこの記事が、どこまで遡れるか定かではないが、若の浦とそれに接した名草の浜（右の記事は毛見の浜もまたその一部であったことも伝える）とが、古来神が示現し、海上祭祀が行われるにふさわしい清浄の地であったことを伝えていよう。『続日本紀』神亀元年（七二四）一〇月一六日の条の聖武天皇行幸の記事に「又詔曰、登山望海、此間最好。不勞遠行、足以遊覽。故改弱浜、為明光浦。宜置守戸勿令荒穢。春秋二時、差遣官人、酋祭玉津嶋之神・明光浦之靈」とあるのは、けっして風光の明媚さだけを称えたものではなく、そこが神を迎えて祀る神聖なる清浄の地であったからこそ「荒穢」を忌んだものと見なければならぬ。

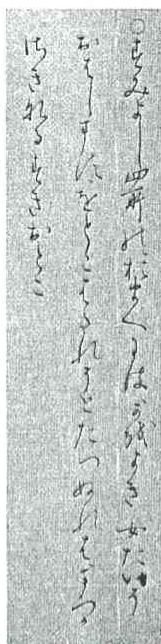
第二に指摘すべきは、この地が榎木氏、宇井氏と並んで熊野の三党とも、あるいは三家、三堂とも称された鈴木氏の居住地であり、熊野神領支配の有力な拠点であったらしいことである。「熊野山略記」の記す所によれば、「権現御氏人漢司符將軍」に三男あり、「一男真

俊榎木氏、二男基成宇井党、三男基行鈴木党也」とし、「三男基行塞野村鈴木爲屋敷、開発耕作稻、御馬草断進之、汝姓穂積定、鈴木党号」であるという。鈴木氏の藤代移住は平安末期のこととされる（『海南郷土史』）が、本宮榎木氏の手になる「永用録」には、「家伝云」として、「當家之先者熊野三堂之一家榎木伊豫守重春之流裔也、其頃能良大臣重尊者、熊野神領之惣奉行として藤白□□二住入、とあるから、藤代の地が早くから熊野神領支配の有力な拠点であったことが窺える。神に仕える者の勢威は神の靈威の振興と不可分である。藤代の地や名草の浜に権現が示現したとする古伝や歌の誕生も、そうした神に仕え、神を祀る者たちの活動と切り離しては考えることができない。四辻頼資の『修明門院熊野御幸記』によれば、承元四年四月二十五日、藤代王子社に参った一行は、先達已下の鳴子舞を奉納し、神前での例事後、「但御神樂、本社八女八人、唱人五人、祇候、八女飄袖、里神樂如例、事了解官給祿、八女各絹一疋、唱人白布各一反、里神樂祿如例、」と記す。藤代王子は、付属の「八女」（やをとめ）―巫女―八人を抱え、「唱人五人」をも抱えて、里神樂を奉納させたのである。春日社の巫女などの例にも見るように、神社に付属する巫女たちは、神に仕え、神を祀る神子であると同時にわが身に神を依りつかせて神の言葉を伝える「物憑き」（口寄せ巫女）でもあった。彼女らの舞う神樂も、神を樂しませるだけでなく神々を招ぎ依りつかせる神招ぎでもあったのである。『鈴木家文書』嘉元三年（一三〇五）正月二日付「法橋某書状」は、「たくせんの御子中」に宛てたもので、藤代の巫女の託宣の布施が託宣の巫女の得分である

ことを記す。同文治三年（一一八七）三月日付の「藤代王子神女惣一職補任状」によれば、彼の「八女」の巫女らは、熊野別当の支配下にあった。これらの「鈴木家文書」の真偽には疑問もあるが、託宣巫女や神樂巫女が存在したことは動くまい。こうした八女や託宣巫女たちが本歌のごとき神の示現を歌う今様神歌の担い手であった可能性も想定しておく必要がある。

（永池健二）

二七三歌



【翻刻】

○すみよし四所の、おまへには、かをよき女たいそ
おはします、をとこはたれそたとつぬれば、まつか
さきなるすきおとこ

【校訂本文】

○住吉四所の御前には 顔よき女体ぞおはします
男は誰ぞと尋ぬれば 松が崎なる好き男

【類歌・関連歌謡】

- ・住吉四所ノ御前二ハカホヨキ女帝ヲハシマス男ハ誰ソト問タレハ松カ崎ナルトシヲトコ（『八幡宮巡拝記』上三香椎宮）
- ・いやくわう神かく神の御まへには いやかほよきみこそまひあそへ いやしゆくしよはいつくととふたれば いや松かさきなるとひおとこ（『天文本神樂歌「かく神の哥」』〔本田安次『伊勢神樂歌考』〕）
- ・高神客神御前には 顔よき御子こそ舞遊へ 宿所はいつこと問ふたれば 松か崎なる富男（『寄合神樂竈清哥』〔同〕）
- ・一ヤアノ高神客神ノおまへには 地 ヤアノ顔よき神子こそ舞遊ベ 一ヤアノ宿所ハいづくと問たれば 地 ヤアノ松ヶ崎なる留おとこ（『伊勢神樂歌秘録』〔同〕）
- ・せうじんかくじの。おまへにハ 顔よき人こそまひ遊ベ。しゆくせうたれぞと といたんれハ。松かや先たつ富男いや面白やん（『伊雜宮神樂歌』〔同〕）
- ・高所、たんなんとひらの神棚にかほよき女躰おはします、をつとはたれぞとひたれば 松のうら葉のとみ男（『玉勝間』）
- ・卷十一所引肥後国の神樂歌）
- ・関より西なる軍神 一品中山安芸なる嚴島 備中なる吉備津宮 播磨に広峰惣三所 淡路の岩屋には住吉西の宮（二四九）
- ・我が子は二十に成りぬらん 博打してこそ歩くなれ 国くの博党に さすがに子なれば憎う無し負い給ふな 王子の住吉西の宮（二六五）

・住吉は南客殿中遣戸 想ひ掛け金外し氣ぞ無き (五四一)

・住吉の一の鳥居に舞ふ巫は 神はつきがみ衣はかり衣尻切裳 (五四五)

・賀茂春日八幡日吉の方の神 稻荷松尾広田住吉 (五五八)

【諸説】

すみよし四所 大阪市住吉区の住吉大社（異説なし） 女たい ①女体：「巫女（遊女）を祭神格に言います」（⑤）全書 ⑥荒井評釈 ⑨大系 ※小西「表向きが神功皇后、裏に巫女・遊女」 ⑬榎本注 ⑭新大系 ※全注釈 ⑮塚本注 ⑯渡辺注「神功皇后（オキナガラシメ）」 ※中村※山上※関口「赤留媛」※八木、②女帝：「神功皇后」 ⑫歌謡Ⅱ ⑬全集 ⑭新全集 ⑮完訳 まつかさき「松生うる州崎」※中村 ⑯（歌謡Ⅱ）「近江国蒲生郡長命寺の南の松ヶ崎」（④）小西注 ⑥全書 ⑦荒井評釈「京都市左京区の松ヶ崎」 ⑧荒井評釈※阿部※八木Ⅱ「大阪市阿倍野の松が崎」※関谷「阿倍野の松ヶ崎」と「松の枝先」の掛詞 ⑩榎集成※関谷「阿倍野の松ヶ崎」と「待つが先」の掛詞 ⑪新大系「松ヶ崎（場所）は特定せず」と「松が好き」の掛詞 ⑫渡辺注 すきおと ⑬「色恋に執心する男（好色）」の字を宛てるものを含む ⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

をさす」※関谷 ⑳塚本注「松ヶ崎狐坂に集う好色な男をいう」※阿部、②「風流な男」 ⑬歌謡Ⅱ「住吉の神をさす」※関口「住吉大社の神主津守家の主をさす」※中村「松に宿る男神をさす」 ⑭榎集成「天之日子をさす」※八木、「松ヶ崎大黒天をさす」※八木Ⅱ

※新聞進「歌謡史の研究その一今様考」（主文堂一九四七年）
※小西基「梁塵秘抄から」（『国文学解釈と鑑賞』十三巻四号一九四八年四月）

※萩谷朴「今様歌異見」（『国語と国文学』三十三巻二号一九五六年二月）
※山上伊豆母「巫女の歴史—日本宗教の母胎—」（雄山閣出版一九七一年）

※中村浩「歌の風土（十）」（『短歌』二十一巻七号一九七四年八月）
※八木意知男「梁塵秘抄二七三番歌考—住吉四所の御前」（『すみのお』一五〇号一九七八年十月）

※八木意知男Ⅱ「松が崎考」（『美作女子大学美作女子大学短期大学部紀要』十二号一九七九年三月）

※関口靜雄「本体観音考」（『宇部国文研究』十三号一九八二年三月）
※本田安次「伊勢神楽歌考」（『錦正社』一九八八年）

※阿部泰郎「湯屋の皇后」第六章「道祖神と愛法神」

（名古屋大学出版会一九九八年）

※堀越孝一「わが梁塵秘抄」（『図書新聞』二〇〇四年）

【語釈】

すみよし四所 住吉四所。大阪市住吉区住吉二丁目に鎮座する住吉大社。摂津国の一の宮。古来、住吉の浜辺には松林が続き、「住吉の松」は万葉集以来多くの和歌に詠まれてきた。「四所」は、神社に祀られている四柱の祭神のこと。秘抄にも「きい三所」（二四六）「いはがみ三所」（二七二）などの例がある。『延喜式』に「住吉坐神社四坐並名神大。月次相嘗新嘗。」とある。現在の祭神は、第一宮底筒男命、第二宮中筒男命、第三宮表筒男命、第四宮神功皇后である。記紀に、伊弉諾尊が黄泉国の汚穢を清めるため、筑紫の日向の橘小戸の櫛原で禊祓をしたときに、少童神とともに現れた底筒男命・中筒男命・表筒男命神が住吉大神であるとする。神功皇后の三韓出兵に際して住吉三神は海上の守護神となり、凱旋の後、荒魂は穴門の山田邑に、和魂は摂津の住吉に祀られ、田蓑見宿禰に奉仕せたと伝える。田蓑見宿禰の末裔が代々津守氏を名乗り住吉社の神主となつたとされる。神功皇后は後に合祀された。住吉の神は古来海上交通の神、境を守る神として厚く信仰されたが、平安中期以降は和歌の神としても信仰をあつめ、貴族の間で住吉参詣が盛んになった。中世になると、住吉の神は和歌三神に数えられ、歌合にその絵像が掛けられるようになる。こうした和歌の神としての性格は、院政期以降、住吉社神主、津守国基によって喧伝されたとみられている（川井純郎氏「和歌神としての住吉社」、竹下豊氏「住吉の神の歌神化を

めぐって」等参照)。

おまへ お前。社前には、の意。秘抄には「お前」の用例が十二例ある。「神に対する尊称」「神社の社前」「前」の意で用いられているが、このうち、「社前」の意で用いられているのは八例(三一四、三六〇、三六二、四〇五、四一六、四一九、四七七、五四〇)ある。従来は「神に対する尊称」として「住吉四所の神の中には」と解釈されてきたが、ここでは「住吉四所の社前には」の意と解する。(考察)参照

かをよき 顔よき。際だつて美しい女性の容貌を褒めている語。今様では、「楠葉の御牧の土器造、土器は造れど娘の顔ぞよき、あな美しやな…」(秘抄三七六)、「長生殿の星あひにちきりしかほよき人なれ(と)馬嵬の堤にゆきしと(き)大唐みかともいかゝせし」(宝篋印陀羅尼經・今様)の用例があり、『万葉集』には「たこのねによせつなはへてよすれどもあにくやしづしそのかほよきに…」(巻十四・三四三〇)の例がある。また、『日本書紀』允恭天皇十一年三月条には、允恭天皇が衣通郎女を愛しく想いその名を後世に伝えたいと詔をするが、その詔に「美麗嬪子」とあり、「かほよきをみな」と訓読されている(『国史大系』)。

女たい 女体。女性の御神体をさしている。『金峯山秘密伝』「子守明神本地垂迹ノ事」に「子守明神」について「此即女体ノ神勝手大明神ノ所妻也」、『神道集』巻七「接州芦刈ノ明神事」に「葦刈ノ男神トテ男躰・女躰御在ス、男躰ハ本地文殊、女躰ハ本地如意輪観音也云々」、謡曲「葛城」に「女体の神とおぼしくて」とあるなど、祭

神について女性の神影を「女体」と称している。「女体」が誰をさすかという点については従来、神功皇后説が有力であった。「女体」を巫女・遊女とする説は、「女体」が女性の神影をさしている語であること、次の項で述べるように「おはします」という敬語が使用されていることから従えない。また、八木意知男氏は住吉社の末社の神である「赤留媛」説をとるが、その根拠は「おまへ」を「お仕えしている人」と解し、住吉の神にお仕えするのは摂社末社の神だからとするものである。しかし、「おまへ」は、先述したとおり神そのものか社前であることをいう語であり「お仕えしている」の意には解釈できない。神功皇后説を代表する論考は関口静雄氏の「聖母御歌考」である。関口氏のあげる根拠は、住吉社の第四宮の祭神が神功皇后であること、『八幡宮巡拝記』に本歌が聖母大菩薩(神功皇后)の歌として引用されていることの二点である。現在、住吉大社の第四宮の祭神には神功皇后が祀られている。また最も古い社伝である『住吉大社神代記』にも「姫神宮。御名、氣帯長足姫皇后宮。奉斎祀神主、津守宿禰氏人者、元手撻見足尼後」とあり、第四殿の神は「姫神」で「氣帯長足姫皇后宮」(神功皇后)であると割注で記されている。『住吉大社神代記』は平安時代の成立といわれているから、平安時代には第四殿の神は神功皇后とされていたと考えられる。神功皇后と住吉三神は古来深い結びつきがある。記紀の三韓征伐神話によると、神功皇后は仲哀天皇の崩御の後、天照大神と住吉三神の神託により懷妊中にもかかわらず新羅に遠征、三韓を征伐し、凱旋の後に住吉三神をお祀りした、とある。この時に生まれたのが応神天皇で、後に

応神天皇は八幡宮の祭神となり、神功皇后も八幡信仰の広がりの中で「聖母」として崇められるようになる。『八幡宮巡拝記』は、鎌倉時代に八幡信仰に基づいて書かれたもので、筑前の国香椎宮の祭神「聖母大菩薩」が「大多羅志女」（神功皇后）であるとし、「聖母御歌云」として住吉四所の歌が引用されている。神功皇后説はこの二点を根拠にしている。従来神功皇后説が有力ではあるが、ここではあえて「女体」は衣通姫のことと考えたい。（考察）（参照）

おはします いらつしやいます、の意。秘抄の「おはします」の全十四例を見ると、大梵天王（二六七）、熊野阿所権現（五四六）、妙見（二八七）、釈迦（二四四）、文殊（一九六）など、仏神がある場所にいらいしやることをさして用いられている。社殿に神が祀られていることをいったものには二六七の「大梵天王は中の間にこそおはします、正法婆利女の御前は西の間にこそおはします」がある。をとこ 男。特別な関係にある夫、恋人。『古今和歌集』九七三歌の詞書に「むかしをとこありけるをうなの、をとことはずなりにつれば」の例がある。秘抄でも、「われをたのめてこぬ男」（三三九）、「をとこをぢせぬ人」（三九八）、「わが身やつれては男のけひく」（四〇九）のように恋愛関係にある男性や恋愛の対象となるべき男性をさしている例がみられる。いずれも「男」は人間、それも同等か目下の者に対して使っている。

まつかさき 松が崎。松林のある崎、の意。諸説では実際の地名をあげる説と特定の地名ではないとする説とがある。地名としては①滋賀県近江八幡市長命寺町の松ヶ崎、②京都市左京区の松ヶ崎、③

大阪市阿倍野区の松ヶ崎の説がある。①の近江の松ヶ崎は、長命寺の南麓で琵琶湖の汀にあり、『拾遺和歌集』の安和元年大嘗会風俗の歌（巻十、六〇七）に詠まれている。②の京都の松ヶ崎は、高野川の西、深泥ヶ池の東南に位置し多くの和歌に詠まれている。『源氏物語』にも「松が崎の小山の色などもさる巖ならねど」とある。八木意知男氏は松ヶ崎の妙田寺の大黒天を「好き男」に想定している（八木旦）。また阿部泰郎氏は、松ヶ崎から宝ヶ池に抜ける峠にある狐坂が『新猿蓑記』の第一の本妻の話にてくる「野干坂」に比定されることから、「好き男」を狐坂に集う好色の男をさすとしている。③の阿倍野の松ヶ崎は現在の大阪市阿倍野区三木町にある。大正十一年の地図で、天王寺駅の南東、天王寺中学の傍らに確認できる。阿倍野には阿倍王子社があつて、四天王寺から阿倍王子社、住吉社、そして熊野へと続く熊野街道が通っている。この三つの地名のうち、①の近江と②の京都の松ヶ崎は、住吉と距離上の隔たりがあり住吉社との関係が見いだされない。また③の阿倍野は住吉社参詣の道筋にあたつており三説の中では有望だが、なぜ「阿倍野なる」でなく「松ヶ崎なる」なのかという疑問が残る。一方、特定の地名としない説では、中村浩氏が根拠は示していないが「松が崎」を「住の江の入江に臨んだ松生ふる州崎」としており、『歌謡Ⅱ』も中村説をとって「松の生えた岬の意か」としている。ここでは、固有の地名をあげる三説はとらず、「松林のある崎」の意にとりたい。「さき」は古代、陸地などの突き出た端のところをいった（時代別国語大辞典上代編）。住吉の浜はかつて砂州が海に突き出た州崎だった。『古事記』

では住吉大神が鎮座した地を「墨江之三前」とし、『釈日本紀』所引『撰津国風土記』逸文には「沼名嶺之長岡之前 前者今神宮南辺、是其地」とある。中世の例では万徳寺藏本「聖徳太子伝」に「住吉西ノ浜ノ州崎」と見える。「松林のある崎」という意味で、住吉社のある地を「松が崎」と呼んだものと考えたい。

すきおとこ 好き男。恋愛や和歌に執心する男の意。これまで女体を巫女・遊女とする説では「好色な男」、神功皇后とする説では「風流なことに愛着をもつ男」の二つに解釈がわかれていた。しかし、平安時代の「好く」は、物事に深く執着することをいい、恋愛、音楽、和歌などへの執心が分かちがたく内包されている。『宇津保物語』『祭の使』で、あて宮に懸想する三春高基が正頼に、あて宮の嬪の候補者たちを「取り給ふ御嬪は、皆すきもの」と誇る場面がある。ここでの「すきもの」は「唯物の音を上手に弾き、和歌もいさゝかに人の勝は取らじ。〔仮〕名書き、和歌詠み、よそ目よき女をば、雲の土地の下を求めても、懸想じ、笑ふ人をは〔耳〕にも聞入れず」と述べられている。楽器を上手に弾き、和歌も人の誹りを受けないほどのものを作り、美しい女性ならどんなことをしても探し求めて恋愛をする、そんな人物が「すきもの」なのである。歌学においては「おほかた、哥はすきのみなもとなり」（西行上人談抄）と言われ、「好き者」の逸話が伝えられている。例えば『無名抄』の「ますほの薄事」では、歌語「ますほの薄」について詳しいことを知る聖がいると聞くやいなや雨の中を尋ねに行った人のことを「いみじかりける数寄者なり」と言っている。同じく『無名抄』俊頼の歌を傀儡がう

たふ事」では、自分の歌を琵琶法師に歌わせた永縁僧正が「有難き数寄人」と言われた話が記されている。従来、「好き男」は、住吉の神・天之日矛、天王寺の雑芸師・賤業者、松ヶ崎大黒天、狐坂に集う好色な男などが想定されてきた。ここでは、住吉社神主であり歌人であった津守国基をさしていると考えたい。先行研究では中村浩氏が「歌の風土（十）」の中で、「州崎の一角に屋敷を構えていた、大社の神主津守家の主を譬喻したものではなかろうか」と一言だけ触れているが根拠は何も示されていない。国基は、和歌への執心ぶり、筆の名手であること（『津守家系図』によると院禪の弟子で筆の上手とある）、『国基集』に女性に送った恋の歌が多く色好みとして知られていたと思われる点などから、「好き男」と呼ばれる条件を備えた人物である。（考察）参照

【考察】

この歌は、「女体」は衣通姫、「好き男」は津守国基をさしており、「住吉四所の前には美人と誉れ高い女の神様衣通姫がおいでになる、愛人は誰かと尋ねると、松が崎の好き男、津守国基だよ」という内容の歌で、神主国基が衣通姫に惚れ込んで住吉にわざわざ勧請までしてしまった、その執心ぶりを揶揄しながらも褒めそやす歌だったと考えたい。以下にその根拠を述べる。

平安時代から鎌倉時代にかけての歌学書に、住吉に衣通姫が祀られているという話が散見する。代表的なものをあげる。

・「衣通姫と申す歌よみは是なり。住吉にべちの神にておはしますと承る」（『俊頼髓脳』源俊賴著、天永二（一一一一）〜永久元（一一

一三三 成立か

・「住吉の社は四社おはします。南社は此衣通姫也。玉津島明神と申す也とぞ津守国基は將作に語り申しける」(『奥義抄』藤原清輔著、天治元(一一二四)〜天養元(一一四四)の成立か)

・「神主国基語頭季卿云、住吉四社中、其一衣通姫也。若浦玉津嶋明神ト申是也。昔カシコラメデマシメルユエニ、アトヲタレタマヘルトナム申伝タルト云々」(『古今集序注』頭昭著、寿永二(一一八三)序、『古今集注』もほぼ同文。

・私云 故左京兆被申云 住吉神主国基云 住吉八本三社也 第四社ハ玉津島明神 即衣通姫也 後ニイハシ給 仍好和歌給云々

(『袖中抄』頭昭著、文治二(一一八六)〜三成立か)

同様の話は『詞林采葉抄』『和歌色葉』『古今著聞集』などにも見える。最も古いのは『俊頼髓脳』で、衣通姫が住吉社の「べちの神」として鎮座していると聞いているとある。一方、『奥義抄』以下の書には、津守国基が藤原頭季に「住吉四社の南社は衣通姫で玉津島明神である」と語った、とある。『袖中抄』に「故左京兆被申云」とあるから、左京兆であつた父頭輔から頭昭や清輔が伝え聞いた話である。「南社」というのは第四宮のことと考えられる。住吉社の第四宮は四つの社の中で南に位置しており、『袖中抄』には「第四社」と書かれている。また『古今集序注』『袖中抄』『古今著聞集』は後に玉津島明神が紀伊の和歌浦の地を愛でて垂迹した、という話を付け加えている。

衣通姫は、身の光が衣を通して輝くほど美しかったために「衣通」

の名があつたとされる女性である。『古事記』では允恭天皇の皇女軽太郎女が「衣通王」、『日本書紀』では允恭天皇の皇后忍坂大中姫の妹弟姫が「衣通郎女」と呼ばれた。『古今和歌集』に歌のり、序に小野小町がその流であると記され、後に歌神として伝承化されているのは、『日本書紀』の允恭天皇妃、衣通郎女である。

津守国基(治安三(一一〇三)〜康和四(一一〇二))は、田養見宿禰の子孫と伝えられ代々住吉社の神主を務める津守家の当主である。康平三(一一〇六)年に三十九代の神主になり四十三年間務めた。勅撰集にも入集している歌人で、橘俊綱の伏見邸歌会にも出席し、白河院の仙洞歌壇のメンバーでもあつた。国基には次のような和歌に關わる逸話がいくつもある。

・『後拾遺和歌集』が別名「小鯨集」と呼ばれたのは、国基が選者に小鯨を贈り歌を多く入集してもらつたからである。(袋草紙、井蛙抄)

・国基は、他の人が歌会で詠んだ歌が秀歌であつたために、不食になつて、歌を考え続けようやく「うすずみにかく玉つさとみゆるかなかすめる空にかへるかりがね」の歌を得た。歌会を開き「帰る雁」の題を出してこの歌を詠み遺恨を散じた。(清輔雜談集、袋草紙)

・国基が、良運の歌の「まくりで」という語について難じたところ良運に言い負かされて閉口した。(袋草紙、十訓抄)

いずれも、国基の和歌に対する執心を物語っている。

藤原頭季(天喜三(一一〇五)〜保安四(一一二三))は、白河天

皇の乳母親子の子で、白河天皇の親任厚い近臣であり、白河院の仙洞歌壇の中心的存在であった。国基もこの歌壇の一員で、顕季とは任地に赴く際に見送りに行ったり大海老を贈ったりと個人的にも親しくしている。『国基集』八七二、一三〇、一三八、一三九、一四一等。『奥義抄』の作者である藤原清輔は顕季の息頭輔の子であり、『古今集注』『古今集序注』『袖中抄』の作者である顕昭は頭輔の猶子である。また、『俊頼髓脳』の作者源俊頼（天喜三（一〇五五）〜大治四（一一二九））は当代一流の歌人で、『金葉集』の選者である。父源経信は伏見邸歌会を通じて国基と親しく、俊頼自身も顕季の歌会にしばしば招かれており国基とも親交があった。『散木奇歌集』には国基との連歌も見える。このように、衣通姫が住吉に祀られているという話は国基と親交のあった歌人やその子孫の間で語られた話であり、単なる噂話ではなく実話であったと考えられる。特に『俊頼髓脳』の記述は、俊頼が国基や顕季から直接聞いた話である可能性が高いだけに重要である。『俊頼髓脳』には「住吉にべちの神にておはしますと承る」とある。俊頼が聞いたのは「衣通姫が住吉四神とは別の神として祀られている」という話である。この話の信憑性は高く、住吉四神とは別に住吉に衣通姫が勧請されたことは間違いない。そしてそれができたのは神主である国基以外には考えられない。国基が衣通姫を住吉に勧請する動機となったとみられる衣通姫の奇瑞にまつわる話が、『国基集』一五三歌の詞書に見える。

住吉の堂の壇のいしとりに、きのくににまかりたりしに、わかのうらのたまつしまに神のやしろおはす、たづねきけば、

そとほりひめのこのところをおもしろがりて、かみになりてをはるなり、とかのわたりの人のいひはべりしかば、よみてたてまつりし

・としふれどおいもせずしてわかのうらにいくよになりぬたまつしまひめ

かくよみてたてまつりたりし夜の夢に、からかみあげて、もからぎぬきたる女房十人ばかりいできたりて、うれしきよろこびにいふなり、とて、とるべきいしどもををしへらる、をしへのままにもとむれば、ゆめのつげのままだにいしあり、いしつくりしてわらすれば、一度に十二にこそわかれてはべりしかば、壇のかづらいしにかなひ侍りにき

この詞書によると、国基は、住吉社の御堂（白河院の勅願寺である莊嚴浄土寺）の礎石にする石を紀伊の国に取りに行った。そこで国基は玉津島社の祭神が衣通姫でこの土地が気に入って垂迹したという謂われがあることを知り歌を詠んだ。すると夢に女房十人ばかりが現れて取るべき石を教えてくれた。夢のお告げのままに石を取り割ったところ一度に十二に割れ、壇の葛石にふさわしい石が得られた、とある。『国基集』は自撰とされているから、この詞書は脚色はあるが国基本人が語る実話である。江戸時代の住吉社社家梅園惟朝が書いた『住吉松葉大記』巻十九には、莊嚴浄土寺や国基の自宅の庭に多数の古石があり、それは国基が「紀州弱浦」からとつてきたものだと伝える。

玉津島社の祭神は稚日女尊と息長足姫尊（神功皇后）だったが、遅

れて衣通姫が祀られるようになり、後に住吉大神と並ぶ和歌三神の一として知られるようになる。国基は玉津島社に行つてはじめて衣通姫が祀られていることを地元の人から聞き深く感じ入る。衣通姫が伝説化された古の歌の名手だったからであらう。この玉津島社のできごとが、国基が住吉に衣通姫を勧請する契機となったと考えられる。

『住吉松葉大記』巻六には、「住吉勸文」の「端書」に国基が紀州弱浦に石を取りに行つたときに強い風雨に会い玉津島明神姫に「としふれど」の歌を捧げると風雨がやみ石を取つて帰ることができた、という言い伝えが記され「東ノ岩橋不動石ト名ケ、天女之宝殿其北ニ在リ」と書かれていることを引用して、「今ニ至ルマテ浄土寺ノ門ノ前、大領村ノ東ノ口ニ大石橋アリ、其ノ岩滑カニシテ青シ、目ヲ驚カスバカリノ大石也、又大領村ノ内ニモ同シヤウナル岩橋アリ、是皆皆紀州ヨリ取り来レル石也、又浄土寺北ノ丘ニ小社アリ、相伝フ玉津嶋明神也、国基神主之ヲ勧請スト、左モアルベキ事也」とある。莊嚴浄土寺の北の丘に国基が勧請したと伝えられている玉津島明神の小社があり、かつては「天女之宝殿」とも呼ばれた、というのである。今回、実地踏査し、この記述の通り、莊嚴浄土寺の北の小高い所にある「東大禪寺」（黄檗宗、寛政三年開基）の境内に、「玉津嶋社」と彫られた青石が置かれているのを発見した。お寺の方のお話によると近年の造作の際に発掘されたものだという。その石は、莊嚴浄土寺の庭園の石と同じ青石が用いられており、国基当時の石である可能性が高い。この石の存在は、国基が玉津島社での奇瑞に感

激し、衣通姫を莊嚴浄土寺の近くに勧請したという言い伝えを裏付けるものである。

莊嚴浄土寺は永長元（一〇九六）年に白河院の勅願によつて、国基が住吉社の東に建立した寺である。国基の紀州での奇瑞と衣通姫勧請の話は、莊嚴浄土寺の創建にまつわる話でもあるから、白河院の歌壇でも評判になったに違いない。本歌はこうした歌壇で語られた衣通姫と国基の話が基になって成立した今様だと考えられる。

住吉社は院政期には歌神として喧伝されており、貴族の間で住吉詣が盛んで、社頭で歌合を行つたり（大治三年「住吉歌合」）、勧進して集めた歌を歌合にして判詞を加え住吉社に奉納したり（嘉応二年「住吉社歌合」）、歌合に勝つた方が報賽のために歌を奉納したり（『長元八年五月十六日関白左大臣頼道歌合』）ということが行われた。長元八年の歌合の時は、述懐和歌が奉納された後、「社司」（国基であろう）が「寿言」を宣べ、雅楽「長慶子」が奏され、「藏人所衆楽人」らが伎芸を尽くして夜を明かしたとある。白河院が住吉社に参詣した際には莊嚴浄土寺にもお参りし頭季や源経信などの近臣と歌披露を行い宴を催したことだろう。こうした住吉社参詣の折の、頭季や経信、俊頼といった当代一流の歌人であり同時に今様の名手でもあった歌人たちの会した歌合の後の宴の席で、主人格である国基を半ば揶揄して囃し立てた座興の歌が本歌だったのでないだろうか。そして、その作者もあるいは、頭季や経信、俊頼といった国基と親しい歌人であった可能性も考えられよう。

住吉社の周辺には遊女がいたと考えられる。『万葉集』に見える

「住吉乃弟日娘」（巻一、六五歌）、「清江娘子」（六九歌）は住吉の遊行女婦とされている。中世には堺の高須、乳守に遊女がおり、一休が愛したとされる地獄太夫は高須の遊女だった。近世に住吉大社の御田植に殖女として奉仕したのは乳守の遊女である。また住吉社の近くには江口神崎がある。住吉社参詣の帰りに貴族たちは江口・神崎に立ち寄った。本歌は遊女たちの間にも広がり、住吉の歌として謡われたに違いない。大江匡房の『遊女記』には、江口、蟹島、神崎の名の知られた遊女を列挙して「皆これ俱戸羅の再誕にして、衣通姫の後身なり。」とある。遊女たちにとって「衣通姫」はその美貌と歌の才で遊女のシンボルとも言える存在であった。『遊女記』にはまた「南は住吉、西は広田、これをもて徴嬖を折るの処と為す」とある。住吉社は広田社と並んで遊女たちが「徴嬖」、即ち客となる男達に召され寵愛を得ることを祈願する神社だった。住吉社に対する遊女の信仰がいつからどのような形ではじまったのかは不明だが、ある時期、その対象が住吉社に祀られた衣通姫であった可能性もあるだろう。

時代が下ると国基にまつわる逸話は忘れられて、八幡信仰の隆盛とともにこの歌は、第四宮の本来の祭神である神功皇后を歌ったものという解釈に引き寄せられていったのではないだろうか。『八幡宮巡拝記』はその解釈に基づいて引用されたものであろう。

（佐々木聖佳）

〔補訂〕選撰第一回 二四五歌

語釈「さう尾よ」の項 原本「さう九上」の所、山内洋一郎「書評 小林芳規・神作光一 王朝文学研究会編『梁塵秘抄総索引』」は、「早尾坂に城をして立籠もる。」（平家物語〈寛一別本〉巻二 堂衆合戦）、「早尾明神者、與日吉神社早尾同神也。古記云、崇福寺鎮守者三尾早尾也云々」（寺門伝記補録、第五）を引いて、日吉の早尾社が「早尾」でなく「早尾」と当時呼称されていた」とし原本を「さうる」の誤写であろうとする。京都府立資料館蔵『平家物語』百二十句本（平仮名本）第二十一句などにも「さうゑさかのじやう」とあって、当時早尾の社が「さうゑ」と呼ばれていた可能性は高い。但し、『伊呂波字類抄』十巻本に「早尾」とあるのをはじめとして、『燿天記』『厳神鈔』『日吉社神道秘密記』等日吉社関係の古記録の大半は漢字で「早尾」と表記し、「早尾権現」（『日吉社権現知新記』）と仮名を振った用例も見られるから、「九」は「尾」の誤記であり、それを「さう」と呼んだ可能性も残っている。なお山内は、二五〇歌「南宮の宮には」の歌の第三句原本「さうゑのおまへ」とある「さうゑ」もこの日吉の「早尾社」と解せないかとする。